記憶の観点からの演劇研究(2)

――理論的背景①：三つの主題系，ベルクソン，アルヴァックス――

山　下　純　照

1　記憶論の三つの主題系

記憶をめぐる二十世紀の言説史は，ほとんどの論者によって言及されないまま，ある種の亀裂をかかえている。すでに指摘したように[1]，ヤン・アスマンに代表される文化的記憶論の系譜では，記憶はあくまで再構成のいとなみとして理解されている。この立場を記憶の構成主義と呼ぼう。これは過去の表象を，アクチュアルに，つまり現在の関心にもとづいて構築するという，意志的かつ意識的な行為をめざす立場である。これに対して，トラウマ的な記憶ないし「記憶しえないものの記憶」，およびプルーストの大作小説『失われた時を求めて』における無意志的記憶は，構成主義とは明らかに異質である。記憶の概念にふくまれるこうした内実の差異に触れないまま，たがいに異なるいくつかの思考が錯綜しているのが現今の記憶論の状況なのだ。

いま述べた中で，トラウマ的な記憶と「記憶しえないものの記憶」は一つのカテゴリーをなすと考えてよいだろう。名状しがたい負の體験が，あるひとの中に自動的に立ちあがる回路として組み込まれてしまい，この回路の遮断，つまり忘却こそが本人の命綱になるという意味で，トラウマ的な記憶は「記憶しえないものの記憶」に属している。しかし逆はどうか。「記憶しえないものの記憶」のなかでトラウマ的な記憶ではないものがありうるかどうか。たとえば，被爆者をあつかった別役実の戯曲『象』（1962年初演，1963年初出）において，「象」という表題のメタファー

(1)　山下 [2004] a. また Assmann, J. [1988] も参照されたい。

は，明らかに「群盲，象を撫でる」の謂いに由来する。つまり部分的，あるいは間接的な手段でしか，原爆というあまりにも大きな惨事に対してはアプローチできないのである。「表象しえないという表象」を通してしか，伝えがたいものがそこにはある(2)。だが，主人公の病人（ケロイドを公開して見せていた実在の被爆者をモデルとする人物）が，ケロイドを見せる「藝人」のようになっていくとき，それは，同じ被爆者を描いた井上ひさしの『父と暮せば』（1994年初演）の主人公である娘のトラウマ（父を原爆でなくし，異性を好きになるという「人並み」の欲望を抑圧している自分に気づいていない）とは異なる光景であるように思われる。しかし同時に，自らが受けた「傷」をあえて人目にさらして生きる人物の中に，トラウマがないと言えばそれも間違いになる。そこで，微妙な差異をふくみながらも，ここでは「記憶しえないものの記憶」とトラウマ的な記憶とを併せ，一つのカテゴリーとしておきたい。

次に，よく言われるプルースト的記憶と構成主義との関係について整理を試みよう。プルーストの描く無意志的記憶は，あたかも海底の遺物のように実在している過去が，無意志的に想起され，この想起が語り手の「自我」にとって生命のよみがえりにも似た喜びの源泉となるような記憶である。それは，過去がそのまま保存されているという観念にもとづく，「強度」と「非消失性」をもつ記憶でもあ

(2) 由紀草一は，そのような別役の手法を「語り難いものを語る方法」として解釈する（由紀 [2002] 312-216頁）。これに関連して，じつは構成主義の記憶とトラウマ的記憶のあいだも，興味深い絡まりあいがあって注意を要する。たとえば最近の仕事では松浦 [2005] がこの問題に触れている（30-32頁）。演劇について言えば，宮本研『ザ・パイロット』（1964年執筆，翌年初演）に登場する，被爆地長崎の祝六平太という老人は，昭和天皇の「玉音放送」が毎年八月十五日に繰り返されるという妄想にとらわれ，「耐えがたきを耐え」て生きよ，というメッセージが彼のトラウマ的記憶となっている（山下 [2004] b 参照）。しかし佐藤 [2005] によれば，「玉音放送」の日をもって終戦記念日とする慣行じたいが，いわば「記憶の55年体制」のなかで樹立されたセレモニーであり，まさに事後構成された記憶なのであって，しかもちょうど宮本研の作品が書かれた六十年代前半に，八月十五日の「全国戦没者追悼式」が閣議決定されたという。ミズーリ号上での降伏調印の日ではなく，「お盆」の「聖霊月」（色川大吉を引用して，佐藤はこのように言う）に「記念日」が設定されたという，このことは，どうやら間違いなく宮本研作品の社会的文脈を示すものであろう。この作品において，記念日の構築性がどのように意識され，あるいは無意識に作用しているのか，またそれはトラウマ的記憶とどのような関係をもつのかは，かなり重要な問題として残っている。

る[3]。そうした過去が，在りし日のままに姿をあらわす體験は，プルーストの小説の主人公に，ある場合には苦痛をひきおこしはしても，大きく見れば生きがいを与える力になっている。だから彼は埋もれた記憶の再発見をもとめて試行錯誤するのである。むろんそうした過程には，記憶の再構成のいとなみもふくまれはするし，それどころか大部分は再構成の努力からなっていると言ってよいほどである。にもかかわらず，この努力して得られる部分は，「理知」のなせるわざで，真の記憶ではないものとされ，あくまでも思いがけず天啓のように訪れる無意志的想起こそが，理想的な想起のありさまとして描かれている[4]。ところが，海底の遺物の再発見という比喩から連想される，独我論的な記憶のありかたとも，プルースト的記憶はやはり区別される，とアレイダ・アスマンは述べている[5]。プルーストの主人公の記憶は同時代の社交の世界と分かちがたく結びついており，そこから，鈴木道彦の言葉を使えば「魂の交流」ともいうべき次元がひらけてくる[6]。そして「魂の交流」をもたらすのは，藝術の創作なのである。こうして，主人公は，決定的な無意志的想起の體験をへて，作家として生きる意志をかためるという結末になっている[7]。ここでは鈴木に従って，作者プルースト／小説の語り手としての「わたし」／主人公の自我，という三つの局面を区別できよう[8]。作者が，語り手の「わたし」という役回りを演じて，「自我」というオブジェクトを描写していくのである。とすれ

(3) Meerestiefe「海底」，Überreste「遺物」というこの形容はアレイダ・アスマンによる。Assmann, A. [1997] S.141,163. また Festigkeit「強度」Unauslöschbarkeit「非消失性」については，S. 158.

(4) プルースト [1992] 第1巻45頁。

(5) Assmann, A. [1997] S. 164. 前述の拙稿（山下［2004］a）ではアスマンによるプルースト理解を固定性（これは「強度」「非消失性」と同義と見てよい）の観点からのみとらえていたが，この機会に訂正したい。

(6) 鈴木 [2002] 206頁。

(7) プルーストと言えば，ややもすると紅茶に浸したマドレーヌの味覚から記憶の大伽藍がたちあがるという箇所（第1巻46頁以下）ばかり言及されるきらいがあるが，この最終的な想起のほうが，記憶の探求の到達点であるから，より重要なものとみなされよう（第7巻164頁以下）。

(8) 『失われた時を求めて』の主人公は，マルセルという作者自身のものと同じ名前を有している。ところが，鈴木道彦の指摘によれば，この主人公名は，遺稿となったため推敲をあまり経ていないとされる最終三分の一で二回，出てくるだけで，それ以外は一度も明示されない。主人公はいわば「無名」なのである（鈴木道彦 [2000]）。これは，作者と主人公の意図的な差異化を傍証するものだ。

ば，無意志的想起という出来事がおこるのは，あくまで描写された世界のなかでであって，それは作中の「わたし」にとっては無意志的なのだが，作者プルーストにとってはそうではないはずだ。このように，作品の創作行為と，描かれている世界の中味を区別すれば，「プルースト的な記憶」の二重性も明らかであろう。創作次元では，それは疑いなく重要な意味で，構成主義の記憶に属しているのである。

このように整理したうえで，やはり作者ではなく，語り手の無意志的想起のほうが，プルーストの作品を特徴づける最大の要素なので——というのは，そもそも藝術の創作というものはすべて意志的行為なのだから，プルーストの特徴とはならない——あらためて作中人物の無意志的想起をもって，とくにことわらないかぎり「プルースト的記憶」と定義するのは許されよう。以下，本稿ではこの立場をとる。そのうえで再び，こうしたプルースト的記憶が，「自我」にとって幸福の源泉になっている(9)という点に注意すれば，プルースト的記憶を，トラウマ記憶と同一の主題系に入れるのは不適切だとわかる。『失われた時を求めて』の語り手の無意志的想起は，まず構成主義的記憶とは一線を画し，さらにまた，希求される體験である点で，「記憶しえないものの記憶」（とりわけトラウマ記憶）ともまったく別種のものなのである。こうして，記憶の言説空間に走る亀裂は二回にわたって枝分かれしており，従って記憶の主題系は——これまでのところ——三種類あることがわかった(10)。

記憶のカテゴリーの区別を述べたところで，次にこれらと，ベルクソンをはじめ

---

(9) プルースト『失われた時を求めて』第1巻および第7巻。

(10) このほかに，物質的に保存されたデータとしての記録を，記憶の第4のカテゴリーとみなしうるかどうか，いずれ考察しなければならないだろう。しかし，常識的には記録は記憶ではなく，あくまで比喩的な意味においてのみ記憶に該当するものであろう。ここには精神と物質，内部と外部を切り分ける二元論についての立場の相異がある。以下，本稿がフォローする，ベルクソンにつらなる立場はまったくのところ二元論的な枠組みによっている。これに対し，記録を記憶の一種と見なすためには，精神と物質の二元論を超えていかなければならない。このように根本的な哲学の問題があるからには，さしあたり本稿では，記録をあくまでも記憶にとっての「他者」として位置づけざるをえない。なお，心理学でいうところの記憶の分類法（長期記憶と短期記憶の区別や，作業記憶／文脈によらない意味記憶／エピソード記憶という三つの区分）は，ここでいう記憶の言説空間におけるカテゴリー分けとは，明らかに異なる視点からのものである。

とする十九世紀末からの記憶理論との関係を検討しよう。そもそも近年の文化研究における記憶の言説をふりかえるなかで，ベルクソンの意義について再考をうながす示唆があった[11]。記憶論の隆盛の一因に，電子テクノロジーの急速な進化の結果として，あらゆる人間の體験や経験が電子データ化され，保存されるいっぽうで，逆に生きた體験としてのその意味合いが忘却されてしまうのではないか，という危機感があった。こうした文脈で，ベルクソンに見られる，持続の概念，および行為としての想起という発想に可能性を見出そうとするのは，じゅうぶん理由があるように思われる。思想的な系脈からみても，先に構成主義の代表格としてあげたヤン・アスマンの文化的記憶論の前提には，モーリス・アルヴァックスの集合的記憶論があり，そのアルヴァックスは，ベルクソンの「弟子」として出発した[12]。その後アルヴァックスはデュルケーム派の社会学者として一家をなしたわけであるが，後にみるように，彼の集合的記憶論はじつのところベルクソンの記憶理論をふまえて，それといわば「つばぜり合い」を演じるようにして書かれているのである。アルヴァックスはベルクソンを批判的に継承したと言っても過言ではない。では両者は何を共有し，どこでたもとを分かつのであろうか。本稿は以下，この問題にささげられる[13]。

2　ベルクソン（1859-1941）

ベーメらの文化研究への『案内』“Orientierung”は，次のようなきわめて興味深い指摘を行っている。「ベルクソンは，〈活動写真 Photoplay〉をわれわれの意

(11) Böhme/ Matussek/ Müller [2002] S. 162.

(12) ベルクソンはアルヴァックスのリセ時代の教師の一人だった。

(13) 同じように，プルースト的記憶，およびトラウマ的な記憶と，二十世紀の記憶理論との関連性も考察されなければならない。プルーストの場合はやはりベルクソンとの関係性が大いに問題になるだろう。しかしそれとともに，フロイトやジャネら十九世紀の心理学者の記憶理論も参照しなければならない。同じことはトラウマ的記憶についても言える。トラウマ的記憶の場合は，そのうえで，二十世紀半ば以降の思想史的展開の中で――すなわち構造主義から脱構造主義への展開の中で――フロイトらの思想がこうむった変容も加味して考える必要がある。こうした事情から，本稿では構成主義の記憶概念とベルクソンの関係に話題をしぼり，プルースト的記憶およびトラウマ的記憶についての同様の作業は今後の課題としたい。

識の流れと比較したフーゴー・ミュンスターベルク（1916）よりも前に，日常的知覚における〈キネマトグラフ的幻影〉について述べている（1907）。ベルクソンによれば，これは一連の個別的イメージを暗示するのもので，本当は體験は一つの連続として，すなわち持続の體験としてあるのだと言う。」[14]

この指摘からわかるように，いかにも現実らしい幻影を暗示的に与えるだけの映画的技術に対して，ベルクソンは持続の體験をこそ，真なるものとして位置づけているのである。持続こそは，ベルクソンの最初の主著『意識に直接的に与えられたものについての試論』（邦訳『時間と自由』）の中心概念でもあり，ベルクソン哲学そのものの中心概念でもある。たとえばオーガーは次のように整理している（彼の整理をさらに筆者がまとめたものである）。

(a) 持続は空間の対立概念である。両者はともに多数の要素から構成されるが，その多数性は異なっている。第一に，空間が多数のものの同時性によって特徴づけられるのに対し，持続は多数のものの継起性によって定義される。第二に，空間が等質性をもつのに対して，持続は異質性を特徴とする。つまり相異なる瞬間どうしは，互いに異質なものとされる。言いかえれば，持続は変化をふくんでいる。第三に，空間の多数性は非連続的なものであるのに対し，持続における多数性は連続體をなす。つまり空間内の点と点は明確に切り分けられるが，持続においては，瞬間どうしがたがいに浸透しあっている。すなわち各々の瞬間が，先立つ瞬間の痕跡をとどめるとともに，次にやって来る瞬間を先取りしている。

(b) 持続は，時間の概念とも区別される。ベルクソン自身が，持続とは真の時間である，という言いかたをしているにもかかわらず，時間の概念は彼においてほとんどの場合は pejorative な（低めた）意味合いで用いられている。持続は，日常的な語感で言うところの存続ないし保存の意味をもっており，持続するものは時が経過してもけっして消失しない。持続は，日常的な意味での時間概念とは次の点で異なっている。時間は，測定にもとづく延長の概念をふくみこんでいるが，ベルクソンの枠組みでは，延長はあくまでも空間概念の特質である。持続は測定にかかるものではないし，けっして延長をもたない。従ってベルクソンにおいて，延長としての空間と，延長をもたない持続の混合したものが，時間なのである。ベルクソ

(14) Böhme/ Matussek/ Müller [2002] S. 162.

ンはウィリアム・ジェームズ宛の書簡（1908年5月9日）で述べている。「私には非常な驚きとともに明白になったのですが，科学的な時間は持続しないのです。すべての現実が突如として一瞬のうちに展開したものだと仮定しても，われわれの科学的な認識には別に何も変化はないでしょう。実証的科学の本質は，持続を排除するという点にあります。」(15)

以上のオーガーのまとめをベルクソン自身からの引用で補っておくとすれば，たとえば次の箇所をあげるべきだろう。「こうして，意識のいくつもの状態がたがいに組織しあい，浸透しあって，だんだんと豊かなものになっていき，そうやって空間とは無縁な一つの自我に純粋持続の感覚を与えることが可能になるだろう，とわれわれは述べた。」(16)

つまりベルクソンによれば，持続はその各瞬間がたがいに有機的に結びついて次第に成長し，豊かなものとなっていく。持続とは，カント的な時間がそうであったような知覚の形式ではなく，内容的に蓄積されていくものであり，要するにわれわれの人生そのものなのだ。先の引用で「一つの自我に à un moi」というように，ベルクソンにおいては持続ないし純粋持続は，自我の體験であると言える。まさにこの点が，ベルクソンの持続の概念に，現代の電子テクノロジーの発達によっておびやかされつつある，人間的記憶の復権のてがかりを見込ませるものであろう。歴史的過去がすべてがデータ化されて超高性能のコンピューターに入力され，適切なプログラムさえ起動すれば必要な知が計算されて出てくるならば，人間存在そのも

---

(15) Oger [1991] S. XII-XVI. ジェームズあての書簡に見られる実証主義批判は，ベルクソンの立場を明快に物語るものとしてぜひ押さえておかなければならないものであるし，科学的時間が持続を知らないというのは一つの卓見ではある。ただ同時に目配りしておきたいのだが，次著『物質と記憶』においては，人間だけでなく個々の物にも持続があるという視点が導入される。もしそうだとすれば，このことは科学的な時間論にも影響をおよぼすのではないだろうか。さらに，実証主義であれ何であれ，遂行するのは学者という人間であるからには，そのいとなみにベルクソンの意味での持続が伴わないはずがないという点である。問題は学者の生としての持続が，学問の内容にどのように反映されうるのかであろう。これは，実証主義にも，暗黙の物語性や歴史性があり，社会文化的ないし政治的枠組みがあると見る，今日の批判哲学の問題提起につらなる論点であるが（たとえば，アーサー・ダントーの歴史理論），ベルクソン自身の文脈からはかなり遠い問題になってしまう。

(16) Bergson [2003] p. 91.（以下，ベルクソンの引用は邦訳等を参照したうえで拙訳）

のがまさにデータの「空間」内の一点として操作可能なものになってしまう。こうした不安が現実のものとなりつつあるからこそ，ベルクソンの持続の概念にそれへの対抗としての期待がかかるわけであろう。

だが，少し先を急ぎすぎたようである。ここでわれわれは，ベルクソンにおいて持続と記憶の関係はどのようなものか，という論点に思いを凝らさなければなるまい。

手がかりとして，再びオーガーの摘要を参考にしよう。彼は述べている。「記憶は持続し，持続は記憶する」（Das Gedächtnis dauert, und die Dauer memorisiert.）[17]「記憶としての持続は，第一に保存しつつあるものである。（中略）過去が今日のなかで生き残っているのは，過去が思い出のなかに痕跡を残すからだけではない。過去はそれじたいで生き残っているのであり，存在論的な意味で過去そのものとして生き残っているのである。（中略）従って驚くべきことに，ベルクソンにとっては，過去は第一には，われわれがそこからやむをえず距離をとってしまった対象ではない。過去はあたかも影のように，われわれにたえずつきしたがい，伴っているものなのだ。」[18] この指摘につづけてオーガーは，記憶としての持続の第二の性格を，過去はたんに保存されるのみならず，だんだんと蓄積されて豊かになっていくのだという，先にも引いた論点に再び結びつけていく。このように，オーガーによるベルクソン理論の要約では，記憶と持続とはほとんど同一視されており，控えめに見ても表裏一體のもの，と言ってよいだろう。

しかしベルクソンの議論がそれにつきるなら，『物質と記憶』が『時間と自由』につけくわえているものは，さしてないと言わなければならない。ところが実際は，オーガーは『物質と記憶』の根幹となる，ある理論構造を省略してしまっているのだ。その点に光を当てれば，持続と記憶とは同一視できないどころか，局面によってはむしろ逆に対照的なものとして浮かび上がってくるはずである。筆者の考えでは，ベルクソン哲学の構図において，持続と記憶のうち，より根本的でかつ純粋なのは持続の概念であり，それに比べると記憶は，持続と同一視されうる純粋な形態から，物質化され，従ってまた空間化されたいわば不純な形態にいたる，ある意味

---

(17) Oger [1991] S. XVII.

(18) Oger, S. XVII- XVIII.

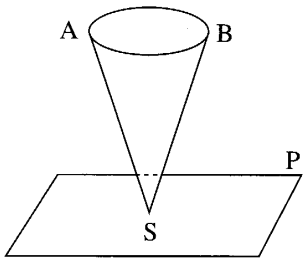

図１

図１で，倒立する円錐形は過去の総體である。底面ABは過去のある断面をあらわしている。平面Ｐは知覚の世界であり，物質の世界であり，現在の世界をあらわしている。過去は，たえず現在へむかって食いこんでこようとして，突端Ｓにおいて平面Ｐと接している。過去の円錐形が属しているのは精神の世界であり，その内容は記憶心像（souvenir image）である。記憶心像からなるこの円錐形の，上方にいけばいくほど，記憶としての純粋性が増し，理念的な極としての純粋記憶（souvenir pur）に近づく。逆に下方にいけばいくほど記憶心像は知覚に近づいていく。知覚にもっとも近づいた理念形としての記憶が，習慣であり，これはパターン化された身體の行動である。それらのあいだにはあらゆる段階の中間的な記憶状態が想定される。また，物質と記憶の接点Ｓとは，身體である。知覚のほうから見れば，いっさいの記憶をふくまない純粋知覚は理論上の仮構でしかなく，身體にあらわれる知覚にはかならず記憶心像がはいりこんでいる。

で曖昧な（人文学者がこのようなとき好んで使う表現を用いれば，両義的な）概念である。このうち物質化・空間化された部分は，時間化された，と言ってもよいだろう。なぜなら，ベルクソンにおいては持続が空間と混合すると日常的な意味での時間になるわけであるから。このように，ベルクソンの記憶概念は段階づけられている。ベルクソンは，理念的な両極をまず想定し，そのあとで実際の構造を段階的な混合形態として想定するという方法をとっている。有名な「純粋記憶／記憶心像／知覚」の区別から「記憶の円錐形」にいたる理論がこれである[19]。その前にベルクソンはこれもよく知られた「二つの記憶の形態」理論を提出しているが[20]，『物質と記憶』の思考の流れから言うと，「二つの記憶の形態」理論はいわばさしあたりの仮説であって，結局は「記憶の円錐形」理論に吸収されていく。図１とその右枠の説明を見ていただきたい。ベルクソンの「記憶の円錐形」理論の要点はここにつくされている。いっぽう，よく引用されるベルクソンの「二つの記憶の形態」理

(19) Bergson [2004] p. 147-181.
(20) Bergson [2004] p. 81-96.

論とは，記憶には，ふだんは無意識のなかに保存されていて，何かのはずみに自発的に意識へと現われ出る記憶心像（souvenirs images）と，ある状況におかれた身體が，意志のもとで自動的に定型的な行動パターンを「演じる」（jouer）ものとしての習慣，という二つの形態があるという仮説である。純粋記憶という理念形はここには姿を現わさない。そして，二つの形態のうちベルクソンにおける評価が高いのは明らかに最初のほう，つまり自発的に無意識のなかから立ち上がってくる記憶心像である。「従ってわれわれが区別した二つの記憶のうち，最初のものこそがすぐれた意味での記憶であるように思われる。」[21] しかし，ベルクソンがただちに注意するように，ふつうに記憶と呼ばれているものは，これら二つの形態が混合したものである[22]。このような混合形態，ないし中間的形態をベルクソンは，洞察を妨げるものとして一度は排除するわけだが，より完成されたモデルである「記憶の円錐形」理論では，これら二つの記憶が，円錐形の上方から下方への移行のなかで再び結びつけられていく。いったん方法論的に分離された二つの記憶は，より総合的な説明モデルのなかで結局は融合するのである。

それでは，持続と記憶の関係はどのように考えられるのだろうか。ベルクソンの構図のなかでは，持続とは純粋記憶である，とするのが唯一可能な位置づけであろう。なぜなら，持続も記憶も過去のすべてを保存，存続させる働きであるから，これほど本質的な働きが二種類あるというのも変な話なのである。両方は，互いに他の別称である，とするのが唯一の理解の仕方ではないか。ただ，持続はつねに純粋だが，記憶は物質的なものと入り交じって混合形態をつくる。だから純粋記憶は持続とイコールなのだが，記憶心像になると「心像 images」であるからには，すでに空間的な性格をもつだろう。とすれば，記憶心像はすでに持続がいくぶん空間化し，日常的な意味での時間に近づいてしまった段階に該当する（従って，ベルクソンにおいて記憶心像は日付をもつ，とされる）。最後に，身體的反復である習慣となると，これはもはや持続とはかけはなれた機械的行為という位置づけになるだろう。

以上，ベルクソンの持続と記憶の理論をスケッチしてみた。ここからはっきりと，

---

(21) Bergson [2004] p. 89.

(22) Bergson [2004] p. 95.

ベルクソンは過去実在論者であって，その記憶論は構成主義的ではない，という結論が導き出されよう。記憶と呼ばれるものは，思い出している人間が現在の関心にもとづいて構築（ないし捏造）した表象以外のものではない，というような発想はベルクソンとは無縁である。そもそも，ベルクソンの記憶理論のなかでは，以上のまとめからもうかがえるように，想起という側面がきわめて希薄なのである。彼において想起は，ほぼ無意志的記憶の自発的な発現に限定されているように思われる。

たぶん，ベルクソンにおいて想起についての重要な考察があるとすれば，それは再認のメカニズムについて行っている思索の部分にあるのだろう。知っているような気がする顔の身元を思い出す仕組みを述べるなかで，ベルクソンは，思い出そうとしている「わたし」が，相手との実践的なかかわりかたを探るという行動の枠組みが，想起のよすがとなるのだと述べている。これはベルクソンのプラグマティズム（実用論主義）との近さを示す箇所であるとともに，相関的な行動は社会的行動に他ならないのであるから，ベルクソンがアルヴァックスのほうへ近づく可能性をうかがわせる箇所でもあるのだが，結局，その方向での展開は見られない。

われわれの研究目的は，演劇であり，これは視覚的な表象を（それは当然，空間的でもある）使用する営みである。ベルクソンの持続の概念は，たしかに時間における有機的な連続性と変化をあつかうには向いており，従って，劇的な展開を記述するには有用な契機であるのは間違いない。しかし，演劇のもう一つの側面である視覚性を論じるには，そのままではきわめて使いにくい概念であると言わざるをえない。後者のためには，持続よりはむしろ記憶の概念のほうが，そもそも持続と空間的要素との混合として設定されているので，応用可能であろう。だがそのうえで問題になるのは，やはりベルクソンにおける記憶の個人的，非社会的な性格なのである。次に，モーリス・アルヴァックスを検証するのは，まさにその点の解決を期して，である。

3　アルヴァックス（1877-1945）

3－1

わが国でも社会学，政治学，文化研究を中心に知られるようになった，このドイツ風の家名（Halbwachs）をもつユダヤ系フランス人の社会学者は[23]，よく引用される反面，その理論がきわめて「わかりやすい」表現をもつためか，学説史的位置づけへの考慮なしにやや安易に使われてしまっている印象がある。筆者の考えでは，少なくとも集合的記憶論にかんするかぎり，やはりベルクソンの記憶理論との関係を見きわめなければならない，と思われる。というのもアルヴァックス自身がベルクソンの理論を批判する形で自説を展開しているからである。

しかし，それだけではない。われわれ自身が後にアルヴァックスの理論を注意深く使うために，両者には意外な共通点があるのではないか，と疑ってみる必要がある。それは何かと言えば，過去の存在根拠にかんする考えかたである。一見したところ，この点で両者の思考様式はまるで正反対に思われる。さきにも述べたように，ベルクソンの思想では，「このような過去それじたいの存続が，いずれかの形で余儀ないものとなる」[24] と言うように，いっさいの過去は無傷のまま持続しているのであり，それは忘却されたとしても，もとのままの姿で再発見可能なものである。これに対し，アルヴァックスにおいては過去の想起は現在の社会的枠組みにおける再構成（reconstruction）の結果である[25]。そして，アルヴァックスが社会的枠組みと言うとき，それは何らかの社会集団によって規定されるのであり，それのみか，

---

(23) 父方がアルザス出身である。アルヴァックスは，義父で美学者であったバシュが，妻とともにヴィシー政権下のリヨンで殺害されたことにいきどおり，調査におもむいたところを逮捕された。そしてブーヘンヴァルトの収容所に移送され，1945年，解放を目前にして死亡した。これは Coser [1992] による。アルヴァックス最期の日々については，同じ収容所から生還した作家ホルヘ・センプルンの『ブーヘンヴァルトの日曜日』に痛ましく描写されている。センプルン [1995] 参照。

(24) Bergson [2004] p. 166.

(25) Halbwachs [1994] pp. 83-113. とりわけ次の文を参照。（記憶内容の）「再生産 reproduire とは，しかし再発見 retrouver ではない。むしろそれは，再構成 reconstruire なのだ。」（Ibid. p. 92.）

アルヴァックスにおいて記憶内容は集合的記憶と呼ばれるにいたる[26]。ここにはベルクソンとのあいだで存在論にかんする根本的な違いがあるように思われる。ただ，じつのところアルヴァックスにおいては，まさにこの集合という概念に対する批判的な吟味こそが問題化されるべきなのではなかろうか。たとえば野上元は次のように述べている。

> 「デュルケーム派の彼（アルヴァックス　――筆者注）がこだわっていたのは，「集合的記憶は社会的な結合の中で保持される」という記憶のもつ微妙な社会性であった。集合的記憶における「集合」を自明のものとしてではなく，それじたい，多様な契機をはらんだ社会学的検討の対象として問題化しようとしていたのである。／しかし，集合的記憶としての「戦争の記憶」は，そうした検討に，ある特定の負荷をかけてしまうような対象である[27]。

しかしそうは言うものの，アルヴァックス自身が，どこまで集合的という概念のなかに多様性を視ていたのかは，慎重な見きわめが必要ではないだろうか。野上は，アルヴァックス理論を戦争の記憶に適用するさいの危うさを警戒する文脈で述べているが，問題はむろん戦争の記憶にはとどまらない。たとえばユダヤ人差別の大事件としてフランス社会を揺がしたドレフェス事件を，記憶の分裂としてあつかうのはじゅうぶん可能であったろう。集合的記憶にかんするアルヴァックスの最初の本『記憶の社会的枠組み』にかんするかぎり，そのような，ある社会集団内部における，あるいは社会集団と社会集団との間の記憶の葛藤というような問題意識は，そこには残念ながらまったく見いだされない。もしこの観察が正しいとすれば，ベルクソンにおいて個人の精神のなかに仮定されていた過去の「実在性」は，アルヴァックスにおいてはある意味で社会集団に移しおかれていると言えるのではないか。これは同じ主題についての未完の遺著『集合的記憶』(1950) のほうでは，一箇所だけ「社会的持続」(！) という表現さえ見いだされるのである[28]。もちろん，アル

---

(26) Halbwachs [1994] pp. 80-81.
(27) 野上 [2002] 69頁。
(28) Halbwachs [1997] : p. 189.（邦訳159頁）

ヴァックスがベルクソン的な「プラトニズム」を破棄しているのは明白である。だが，アルヴァックスが，家族，宗教社会集団，階級といったそれぞれ異なる位相において考察を展開するときでさえ，それらの内部での多様性や，緊張関係，およびそれら相互の競合といった次元への目配りを見せてはいない。その意味では，『記憶の社会的枠組み』の記憶理論は，なんらかの社会集団の「実定性」に依拠していると言えそうなのである[29]。

3－2

アルヴァックスの『記憶の社会的枠組み』は，純粋記憶（souvenir pur），記憶心像（souvenirs images/ images-souvenirs），習慣記憶（souvenirs-habitudes）あるいは動作記憶（souvenirs-mouvements）といったベルクソンの基本的概念に言及しつつ，いわばその土俵のうえで，社会学的視点を武器としてベルクソンに正面から議論をいどんでいる。その意味ではきわめて論争的な仕事である。この本は前半が一般理論で，後半は各論であるが，その前半はまるごとベルクソン批判にあてられていると言っても過言ではない。本稿はアルヴァックス文献学をこころざしているわけではないから，五十箇所近くにおよぶベルクソンへの言及を逐一ひろいあげるのは適切ではないだろう。以下，八点にまとめて，アルヴァックスによるベルクソン批判を概観するにとどめたい。名前の言及はなくとも実質的にベルクソン批判と思われる箇所は*印を付した。頁数は Halbwachs [1994] による。（　）内は筆者による補足である。

① p. 20.（ベルクソンは記憶を論じるのにさいし，夢で見るイメージを扱ってい

(29) 集団の実定性とは，プラトニックな実在性とは異なり，集団の変化や変質，さらに消滅をも認容する概念である。しかし同時に，ある共時的な瞬間をとれば，そのかぎりでは集団の輪郭や構成メンバー，その同一性にいささかの疑問もさしはさまれていないような把握のしかたを言う。ただ，『集合的記憶』においては，やや様相が異なってくる。ここでアルヴァックスは，歴史的記憶と集合的記憶の関係という視点から，国家の記憶と個人の記憶の緊張関係といった，あるいは集団どうしの緊張関係といった記憶の多様性の問題にある程度，踏みこんでいるように思われる。しかし『集合的記憶』はあくまで未完の遺著であり，じっさい歴史と記憶の関係についてのアルヴァックスの見解も揺れ動いているところがある。さらに集団の記憶の多様性については，アルヴァックスの他の論文も併わせて検討しなければならないので，別の機会にまとめたいと考える。

るが）しかしベルクソンによる記憶の二形態（具體的な日付をもつ一回的な記憶心像と，反復される習慣記憶）という区別を採用すると，目覚める瞬間に見る夢のイメージは，（夢の内容には日付がないので）そのどちらにも入らない。② pp. 33-35.* （ベルクソンによると）思弁的な思考とは相容れない記憶の連続というものがあるそうだが，じっさいは想起という出来事は，なんらかの秩序ある枠組みのもとでの再構成のいとなみである。③ pp. 37-39. ベルクソンは，記憶と夢との明白な相容れなさを認めない。彼は記憶心像をわれわれの過去そのものだと考えて，そこに記憶が保存されており，もし精神がもはや現在に向けられず，覚醒時の活動を停止すれば，精神はごく自然に過去へと沈潜していくものだと考えている。（しかし本当は）記憶内容は再構成されるものなのであるから，比喩的にでないかぎり，目覚めている状態で記憶を「再び生きる revivre」とは言えない。また，われわれがかつて體験したこと，見たこと，行なったことが，すべてそのままに存続しており，われわれの現在は過去を曳航しているのだという想定には，根拠がない。④ p. 49-58. ベルクソンは，われわれの感覚器官によってフィルターをかけられた漠然とした感覚刺激が，眠りのなかでどのようにして記憶内容を生じさせるのかを説明しようとして，感覚刺激によって身體のなかに呼び起こされる物理的変化を示唆している。知覚がなお働き続ける模倣運動こそが，心像の選択をつかさどるとともに（この模倣運動が），知覚と再想起された心像の両方の枠組みとして働くのだと言う。しかしこの方法では，脈絡をもつ夢が説明できない（強調は筆者）。本当は，人間は眠りながら心のなかで発話しているのであり，言語活動が記憶の生成を支えているのである。そして，言語活動は，明らかに社会的な性格をもつ。⑤ p. 60. ベルクソンはまた，聴解という行為において，音が次々に耳に入ってくるのにつれて各語の記憶心像が一つの流れとして喚起されていく過程について，そこにはある種の運動図式（schéme moteur）があると述べている。このような運動図式ははたして意志の影響なしにいわば自然に獲得された習慣なのか，それとも社会の影響によって生じるのかを問おうではないか。⑥ p. 92.（注㉕に既述）⑦ pp. 98-103. ベルクソンは，なんらかの心像の再生産を許すのは動作（mouvements）であり，それは現在の知覚によって選択されるものだが，以前の心像がこの新たな動作のなかで存続できる場合には，心像はこの現在の知覚へと接近してくる，すると知覚はこの心

像を覚知するのだと，そう考えている。すると，どんな心像にも駆動性があって，それが身體的な態勢に結びつくというわけであろう。だがこうした考えは，問題を複雑にするだけではないか。意識状態ではなく身體について語るのは，かえって事柄を見えにくくする。むしろわれわれは，（記憶）心像はその一つの側面によって，現在の意識の中の表象に結びつくのだと考えたほうがよい。こうして，心像とその（現在の）枠組み（cadres）の連続性にゆきつくのである。だから枠組みがあれば，心像を再構成しうるのである。⑧ pp. 117-131. ベルクソンは精神生活を，先端が物質をあらわす平面に接した円錐形で説明している。この理論によれば，記憶のさまざまの中間状態のうち，円錐形の先端に近づくほど，記憶は習慣的な身體的行為に似てきて，想起される内容は限られてくる。逆に過去へと遠ざかるほど，内包される記憶心像が増加するので，想起は豊かなものになる。これによれば，何かが想起できないときに，想起できるようになるためには，次々に記憶の中間状態を過去のほうへとさかのぼらなければなるまい。だがそれは，間違っている。高みに登った村人が，村の風景を手に取るように把握できるのは，視界の情報量が飛躍的にふえるからではなく，逆に細部が省略されて，あらかじめ頭に入っている図式と照らし合わせて土地の概要が認知できるからだ。想起においても，思惟の助けを借りて論理的に全體像が構成できることが肝腎なのであり，非連続なものではあっても想起の手がかり（points de repère）があれば，あてずっぽうに「中間的記憶」（souvenirs intercalaires）をさまよう必要はないのである。そして，このような想起の手がかりは，まったく個人的なものにはとどまらないのであって，むしろ日常の活動や，家庭や，職業的活動，学問的な活動，といったさまざまの領域における出来事からなっている。すなわち，われわれが帰属している諸集団の生活における顕著な出来事こそが，想起の手がかりとなるものなのだ。想起の手がかりは，ある集団のメンバーに共通している。いったん消えた記憶内容を再構成する枠組みは，純粋に個人的なものではない。

以上の要約からは，記憶の再構成の社会性を強調するアルヴァックスと，個人的記憶にとどまるベルクソンとのあいだに共通点はないかのように見えるかもしれない。が，そのようにとらえるのは正しくない。アルヴァックスがこれほどあからさまにベルクソンを裁断せざるをえないのは，彼がじつのところベルクソンの土俵の

うえで闘っているからである。筆者の観るところでは，両者のもっとも重要な共通基盤は，行動の概念である――アルヴァックス自身は，ベルクソンとの（この点での）つながりをはっきり述べていないのだが，たとえば，「記憶とは弱められた知覚である」というような説（ヒュームら）とはまったく異なるという点に注意すれば了解されよう。ベルクソンにおいて記憶心像は，知覚からは独立して保存されている（そのうえで，「現在」に混入して日常的な知覚の働きを成立させる）。そして現在から特定の記憶心像に到達する（つまり想起する）には，「一気に過去へと」自己移入し，そのうえでカメラの焦点合わせのように，探し求めている記憶心像へだんだんと注意を集中させていくのだと言う[30]。さらにベルクソンはこうも言う。

> 記憶（mémoire）について言えば，身體の役割（le rôle du corps）は記憶内容（souvenir）を貯蔵することにあるのではなく，もっぱら，有用な記憶内容（le souvenir utile）を選択することにある。身體がこの記憶内容にさずける現実的な有効性によって（par l'efficacité réelle qu'il lui confère），そうした記憶内容は，はっきりと意識されるようになる。この有用な記憶内容が，目的とする行動の文脈で目前の状況を補い，解明するのである[31]。

引用した部分は，「身體」を「意識」と言いかえ，「行動」に「社会的」という形容詞を冠すれば，そのままアルヴァックスの文章に出てきてもさして異和感はないだろうと思われる。とりわけ「この有用な記憶内容が，目的とする行動の文脈で目前の状況を補い，解明するのである（celui qui complétera et éclaircira la situation présente en vue de l'action finale）」という箇所からは，ベルクソンにおける記憶（ここでは，実質的に想起とみなしてよいだろう）は，「目前の状況」と結びつけられて，実用論的な行動主義を思わせるのである。たとえばG. H. ミードの自我構成論（「精神のなかに持ち込まれた内容は，単に社会的相互作用の発展であり，産物に過ぎない」[32]）を補助線にすれば，アルヴァックスの記憶理論が，ベルクソ

---

(30) Bergson [2004] pp. 148-150.
(31) Bergson [2004] p. 199.
(32) ミード [1995] p. 235.

ンの記憶理論とそれほど変わらない構造をもつものであり，いわば後者の社会学的な「解釈」になっているという見かたも不可能ではない。たしかに，ベルクソンのように，実在している過去が現在に現われ出たものが記憶心像だと考えるか，それとも記憶心像は現在の視点から過去を構成したものだと考えるかは大きな違いではある。しかし，アルヴァックス自身が，先にも見たように，個人のではないにせよ，社会集団の持続というよりどころに立っているからには，ベルクソンとの距離は意外に近いとも言えるのである。

筆者の考えでは，ベルクソンとアルヴァックスのもっとも大きな違いは，言語観にある。ベルクソンの記憶理論において言語の力は ―― 観察材料としての失語症などの例はあるにしても ―― 構成的にはまったく何の役も演じていない。これに対してアルヴァックスにおいては，『記憶の社会的枠組み』の一章が「言語と記憶」と題されて，そこでは記憶心像を「名指す」行為が重視されている[33]。記憶に名称が与えられるのは，記憶の社会性の証左となるのである。先に触れたように「夢のなかの発話」という指摘もある。アルヴァックスが記憶における秩序とか，脈絡のある夢とか言うとき，こんにちわれわれの目から見れば，これは「語り」の秩序であり，「物語的」な脈絡である，というナラティヴ論の見かたを連想せざるをえないであろう。20世紀後半の集合的記憶論において，ナラティヴ論はもっとも大きな柱の一つである。もちろん，アルヴァックス自身においては，集合的記憶の構成におけるナラティヴが展開されているとまでは言えない。だが，まさにその方向に，彼は決定的な一歩を刻印したと言ってよい。

文献

Assmann, Aleida [1997] : *Erinnerungsräume*. München: Beck.

Assmann, Jan [1988] : Kollektives Gedächtnis und kulturelle Identität. In: Assmann, Jan; Hölscher, Tonio (Hrsg.) : *Kultur und Gedächtnis*. Frankfurt am Main: suhrkamp taschenbuch wissenschaft. S. 9-19.

ベルクソン [1990]：『時間と自由』平井啓之訳，白水社。原著：*Essai sur les données immédiates de la conscience.*

(33) Halbwachs [1994] pp. 40-82.

Bergson, Henri [1991] : *Materie und Gedächtnis. Eine Abhandlung über die Beziehung zwischen Körper und Geist.* Übers. von Julius Frankenberger. Hamburg: Meiner. Original: *Matière et Mémoire.*

アンリ・ベルグソン [1995]：『物質と記憶』田島節夫訳，白水社。原著：*Matière et Mémoire.*

Bergson, Henri [2003] : *Essai sur les données immédiates de la conscience.* Paris: Presses Universitaires de France. Originalement: 1888.

Bergson, Henri [2004] : *Matière et Mémoire.* Paris: Presses Universitaires de France. Originalement: 1896.

Böhme, Hartmut/ Matussek, Peter/ Müller, Lothar [2002] : *Orientierung Kulturwissenshcaft. Was sie kann, was sie will.* Hamburg: Rowohlt 2000[1].

Coser, Lewis A. [1992] : Introduction. In: Halbwachs, Maurice: *On Collective memory.* Edited, Translated and Introduced by Lewis A. Coser. Chicago and London: The University of Chicago Press, pp. 1-34.

Halbwachs, Maurice [1985] : *Das Gedächtnis und seine soziale Bedingungen.* Übers. von Lutz Geldsetzer. Frankfurt am Main: suhrkamp. Original: *Les cadres sociaux de la mémoire.*

モーリス・アルヴァックス [1989]：『集合的記憶』，小関藤一郎訳，行路社。原著：*La mémoire collective.*

Halbwachs, Maurice [1994] : *Les cadres sociaux de la mémoire.* Paris: Édition Albin Michel. Première édition: 1925.

Halbwachs, Maurice [1997] : *La mémoire collective.* Paris: Édition Albin Michel. Première édition: 1950.

松浦雄介（Matsu'ura, Yûsuke）[2005]：『記憶の不確定性』，東信堂。

G. H.ミード（Mead, George Herbert）[1995]：『精神・自我・社会』，河村望訳，人間の科学社。原著：*Mind, self, and society: from the standpoint of a social behaviorist.*

野上元（Nogami, Gen）[2002]：「1930年代と「戦争の記憶」」（吉見俊哉編『1930年代のメディアと身體』，青弓社，67-91頁）。

Oger, Erik [1991] : Einleitung. In: Bergson [1991] S. Ⅸ-LⅦ.

マルセル・プルースト（Proust, Marcel）［1992］：『失われた時を求めて』第１巻～第７巻，井上究一郎他訳，新潮社，1974[1]。

佐藤卓己（Satô, Takumi）[2005]：『８月15日の神話 —— 終戦記念日のメディア学』，ちくま新書。

鈴木道彦（Suzuki, Michihiko）[2000]：「自伝的文学」http://www.jimbunshoin.co.jp/rmj/jiden.htm#

鈴木道彦 [2002]：『プルーストを読む』，集英社。

ホルヘ・センプルン（Semprun, Jorge）[1995]：『ブーヘンヴァルトの日曜日』，宇京頼三訳，紀伊國屋書店。原著：*L'écriture ou la vie.* Éditions Gallimard 1994.

山下純照（Yamashita, Yoshiteru）[2004] a：「記憶の観点からの演劇研究(1) —— 文化研究を意識した演劇学の構築をめざして ——」（『千葉商大紀要』第42巻第３号）

197-219頁。
山下純照 [2004] b：「記憶のドラマトゥルギー ―― 宮本研『ザ・パイロット』から井上ひさし『闇に咲く花』へ ――」（大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室編『演劇学論叢』第７号）52-67頁。
由紀草一（Yûki, Sôichi）[2002]：「別役実「象」三幕」（日本演劇学会・日本近代演劇史研究会編『20世紀の戯曲――現代戯曲の展開』，社会評論社，310-322頁）。